A group of children in school uniforms are gathered around a large, thick tree trunk. One boy is climbing the tree, while others are holding a green string to measure its circumference. The scene is outdoors, with a yellow building and other trees in the background.

国際教育協力を学ぶスタディツアー
～スリランカの小さな村で私たちができること～

2023年度スタディツアー参加学生一同
聖心女子大学 永田佳之研究室(教育学科)

目次

はしがき.....	1
序「ともにつくる未来に向けて」.....	2
スリランカスタディツアー参加者.....	3
お世話になった方々	4
一言メッセージ.....	5
スリランカの基本情報	6
旅程(スリランカタイムスケジュール)	7
ESD Workshop (記録).....	12
—1日目—.....	12
—2日目—.....	20
—3日目—.....	28
コラム「ゴミ処理場訪問」.....	33
感想文集.....	36
むすびにかえて.....	68

はしがき

スリランカへのスタディツアーを始めてから 10 年が経ち、この間、7回のプログラムを組んできました。当初は、現地の実際を目で見て感じ、人々との交流を通して現地の暮らしや文化などを学ばせていただくスタイルをとっていたものの、徐々に実践型へとそのスタイルを変えてきました。つまり、その地域ならではの問題を調査し、地元の人々と共にその解決法を模索するスタイルです。

ここにお届けする報告書は、JICA(国際協力機構)の「草の根技術協力事業(支援型)」に採択された国際協力事業の一環として実施された実践型スタディツアーの記録及び感想文集です。この事業の正式名は「公立学校を拠点としたゴミ問題解決のためのグリーンユース・コミュニティ形成事業」であり、2022 年 9 月に聖心女子大学がペラデニヤ大学と国際協力に関する協定を締結し、翌年 2 月から2年間の予定で着手されました。スリランカの寒村にある小さな小学校に環境教育センターとしての機能をもたせ、教師主導の伝統的な教育が根付いているスリランカにおいて、若者が主体となって問題解決に取り組めるようになるための試みです。

今回、学生たちは、慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科のご協力のもとに、独自の環境教育教材の開発とそれを活用したワークショップを実践し、現地の子ども達に学びの楽しさ(ジョイフル・ラーニング)を共有してきました。学生たちは自作の学習プログラムを用意し、コロナ禍で喘いだ子ども達に素敵な笑顔をもたらしていました。同時に、子ども達との時間は、この報告書の随所に現れているように、学生たち自身も大切なことに気づき、学ばせていただく機会となりました。この報告書は、コロナ禍で学生生活の不自由を余儀なくされた若者たちが、その間に蓄えた潜在的な可能性をフルに活かすかのごとく全力で挑んだ活動の記録でもあります。本報告書が現地で学生たちがどのようなチャレンジをし、いかなる学びをしたのかをご理解いただける一助となれば幸いです。

最後になりますが、学生たちをお導きいただいた皆様、特に慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科の大川恵子先生、明石枝里子先生、前川マルコス貞夫先生、エマン・アームドさん、JICA スリランカ事務所の山田哲也所長、井出ゆり次長、吉田清史様、櫻澤崇史様、野口拓馬様、青年海外協力隊員の森樹音様、南優香様、奥寺信行様、ペラデニヤ大学大学院科学研究所(PGIS)のピトゥワラ所長、チャンドラセーナ先生、バンダラ先生、パンドウッカ先生、大学院生のクムタ・キャナパシーさん、ディヌーシャ・ワニナヤケさん、ニランティ・マラシンへさん、ウイマラブディ小学校の D.M.H.バンダ校長先生、キャンディ市役所廃棄物管理課のナマルさん、キャンディ市教育事務所のディプシーさん、はじめ、このツアー実現のためにご理解をいただきました参加学生の保護者および聖心女子大学教職員の皆様様に心よりのお礼を申し上げます。

2023 年度スリランカ・スタディツアー世話人
永田佳之

序「ともにつくる未来に向けて」

私とスリランカとの出会いは 2016 年、私が博士前期課程の院生時代からである。スタディツアーに参加したことがきっかけだった。たった 3 日間のワークショップで子どもたちと私たちの想いが重なる体験をしたことが今につながっている。このスタディツアーでは、「国際協力とは何か」博士前期課程に入学する前に経験していた国際協力という世界を研究という視点をもって改めて考える機会でもあった。

いわゆる国際協力とは、途上国への支援だと思われがちだが、私にとっての国際協力は「言葉と文化の壁を越えた出会い」である。そう考えるようになったのは、言葉と文化を越えて出会い、時間を共有できる空間にいて、人間としての根源に触れられ、自分自身が満たされた感覚になるからかもしれない。私はその出会いを通して、ともに何ができ、何を学び、何を感じたのか、そしてどのような時間をともに過ごせたのかに思いを巡らせている。

今回のスタディツアーはこれまでと異なり、JICA 草の根技術協力事業の一環として実施された。学生にとっては将来につながる貴重な経験だったかもしれない。どのように現地の人々、学校とその地域、大学関係者、行政と連携してプロジェクトを進めていくのか、自分たちが考えたワークショップへの期待と不安。日本を離れて気づく新しい見方や自分自身の将来など、色々な気持ちが入り混じっていたことと思う。今回のスタディツアーに参加した学生それぞれにどのような出会いがあったのか、本報告書の完成がとても楽しみである。

下記にワークショップの成果と課題を挙げる。

《成果》

- ・対象を設定し、対象に合わせたワークショップが実施できたこと
- ・参加した子どもたちの積極的な参加
- ・慶応義塾大学大学院と聖心女子大学の協働

《課題》

- ・教員と地域(両親など家族も含む)を巻き込むワークショップの実践
- ・ワークショップ参加者の限定
- ・シンハラ語と英語の通訳

共同実施大学であるペラデニヤ大学および協力校の慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科の先生や院生と相談しながら、学校および地域を巻き込んだよりよいプロジェクトになるよう進めて参りたい。

聖心女子大学グローバル共生研究所
神田和可子

スリランカスタディツアー参加者

聖心女子大学

【学生】

1年生

- ・堀江凜 Rin Horie 基礎課程
- ・増田美玖 Miku Masuda 基礎課程

2年生

- ・園田詩歩 Shiho Sonoda 国際交流学科グローバル社会コース

3年生

- ・岩本芙季 Fuki Iwamoto 教育学科教育学専攻
- ・漆澤有香 Yuka Urushizawa 教育学科教育学専攻
- ・栗林幸香 Yuuka Kuribayashi 教育学科初等教育学専攻
- ・坂東優 Yu Bando 教育学科教育学専攻
- ・湧井ひかり Hikari Wakui 心理学科

4年生

- ・南木美咲 Misaki Nanmoku 国際交流学科グローバル社会コース
- ・三浦さくら Sakura Miura 教育学科教育学専攻

【教員】

- ・永田佳之 Yoshiyuki Nagata 聖心女子大学現代教養学部教育学科教授
- ・神田和可子 Wakako Kanda 聖心女子大学 現代教養学部 グローバル共生研究所 助教

慶應義塾大学

- ・明石枝里子 Eiko Akashi 慶應義塾大学 グローバルリサーチインスティテュート
- ・Eman Ahmed 慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科 大学院生
- ・前川マルコス貞夫 Marcos Sadao Maekawa
慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科

お世話になった方々

JICA スリランカ事務所

山田哲也所長

井出ゆり次長

吉田清史様

櫻澤崇史様

野口拓馬様

青年海外協力隊員

森樹音様

南優香様

奥寺信行様

University of Peradeniya ペラデニア大学

•H.M.T.G. Amarasooriya Pitawala ピトゥワラ所長

Science Education Unit Faculty of Science

•Dr. W.D. Chandrasena Senior Lecturer チャンドラセーナ先生

•Mr. A.M.R.S. Bandara Lecturer バンダラ先生

Post Graduate Students at PGIS

•Dinusha Wanninayake ディヌーシャ・ワニナヤケさん

•Kumutha Kanapathy クムタ・キャナパシーさん

•Nilanthi Marasinghe ニランティ・マラシンヘさん

Kandy Zone Development director キャンディ市教育事務所

•K.d.d.priyadarshani プリヤダシャニさん(ディプシーさん)

Municipal Mechanical Engineer キャンディ市役所廃棄物管理課

•Namal D. Dissanayake ナマル・ディサナヤケさん

Vimalabuddhi School

•D. M. H. Banda Principal バンダ校長先生

一言メッセージ

・明石枝里子さんより

限られた情報やリソースに臆する事なく、一人一人がこれまでに培ってきた知識や経験を基にアイデアを出し合い、協力して教育コンテンツを考え、実施する力。どのような方にも真摯に向き合う精神、などなど、今回の訪問で皆様からたくさんのお話を学びました！

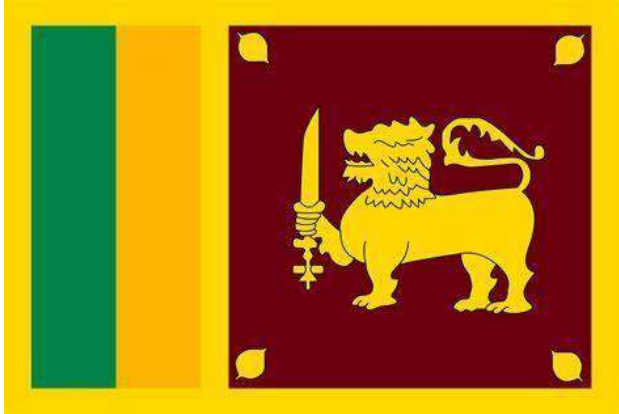
今回皆様とご一緒できた事で、現地の対象者(児童)だけではなく、現地大学の教職員や大学院生をもエンパワメントでき、このプロジェクトの可能性を大いに広げることができました！

本スタディツアーで実践力を養った皆さんの今後のご活躍がとても楽しみです。

・神田和可子さんより

2016年に初めてスリランカへ赴き、コロナや経済危機を経て、7年越しの2023年にみなさんとプロジェクトをともに進めることができたことが感慨深いです。一人ひとりがチームの一員としてワークショップづくりに参加してくれたことに心より感謝申し上げます。今回のスタディツアーを振り返って、みなさんが何を感じ、考えたのか、報告書を楽しみにしています！

スリランカの基本情報



正式名称:スリランカ民主社会主義共和国

首都:スリ・ジャヤワルダナプラ・コッテ

面積:約 6 万 5610 平方キロメートル(北海道の約 0.8 倍)

人口:約 2216 万人(2021 年、スリランカ中央銀行統計)

民衆:シンハラ人(74.9%)、タミル人(15.3%)、スリランカ・ムーア人(9.3%)

言語:シンハラ語、タミル語 連結語(英語)



宗教:仏教徒(70.1%)、ヒンドゥー教徒(12.6%)、イスラム教徒(9.7%)、キリスト教徒(7.6%)

元首:ラニル・ウィクラマシンハ大統領

政体:共和制

通貨:スリランカルピー

主要産業:農業(紅茶、ゴム、ココナッツ、米作)、繊維業

在留邦人数:678 人(2022 年、在スリランカ日本大使館調査)

参考文献

・外務省ホームページ「スリランカ基礎データ」

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/srilanka/data.html>

旅程(スリランカタイムスケジュール)

DAY0	8/15 (火)
概要	<ul style="list-style-type: none"> •11:35(日本時間) 日本出発 •17:25(現地時間) コロンボ到着 •21:00 屋台レストランで軽食 •23:00 ホテル到着

DAY 1	8/16 (水)
概要	<ul style="list-style-type: none"> •9:00 Vimalabuddhi School 到着 •10:00~12:00 ワークショップ1「Environmental Sustainability」 •軽食とラップアップ •13:00 生徒の2家族の家に訪問、村の訪問観察 •15:30 University of Peradeniya 到着 •17:00 ホテル到着 •21:00 一日の振り返り



Day2	8/17 (木)
概要	<ul style="list-style-type: none"> •9:00 Vimalabuddhi School 到着 •10:00 ワークショップ 2「Joyful Learning Activities」 •軽食とラップアップ •14:40 University of Peradeniya 到着、ベースライン調査データの共有セッション •16:00 UoP 副学長との対談 •17:30 ホテル到着 •21:00 振り返り



Day3	8/18 (金)
概要	<ul style="list-style-type: none"> ・9:30 市役所訪問「Solid Waste Management」 ・軽食 ・11:50 ダンピングサイトへの訪問 ・14:00 University of Peradeniya 到着 ・14:15 永田教授から工学部大学院生に向けて「Precious Plastic」の講義 ・15:30 工学部の研究施設視察 ・16:50 ホテル到着 ・21:00 振り返り



Day4	8/19 (土)
概要	<ul style="list-style-type: none"> •9:00 University of Peradeniya 到着 •9:30 ワークショップ3「Green Youth Project workshop」 •軽食、昼食 •15:00 JICA 青年海外協力隊の発表 •17:30 food city で買い物 •18:00 Amaya hills ホテル到着 •18:40 ホテル到着 •21:00 振り返り



Day5	8/20 (日)
概要	<ul style="list-style-type: none"> •12:00 Amaya hills ホテル到着 •17:30 Temple of the Tooth (Buddhist temple) 到着 •24:00 ホテル到着



Day6	8/21 (月)
概要	<ul style="list-style-type: none"> •9:30 University of Peradeniya 到着 •10:00 神田先生と Marcos さん、明石さんによるワークショップ5 「Workshop for Teachers」(target: ma, phds and younger + motivated teachers) •永田先生による発表 •軽食 •16:00 ペラヘラ祭に向けて出発 •20:40~22:30 ペラヘラ祭 •23:00 ホテル到着



Day7	8/22 (火)
	<ul style="list-style-type: none"> •10:30 University of Peradeniya 到着 •10:50 振り返りと軽食 •14:00 ホテル到着 •16:00 University of Peradeniya 到着、お別れ会 •17:50 Amaya hills ホテル到着 •21:30 ホテル到着、振り返り



Day8	8/23 (水)
概要	<ul style="list-style-type: none"> •9:00 ホテル出発 •13:30 地元のスーパーで買い物、軽食 •14:00 JICA SRI LANKA 事務所に到着、対談 •19:50 コロンボ出発



Day9	8/24 (木)
概要	<ul style="list-style-type: none"> •8:15(日本時間)日本到着、解散

ESD Workshop (記録)

Workshop on Environmental Sustainability

—1 日目—

アイスブレイク Collect colored balls

1. 目的

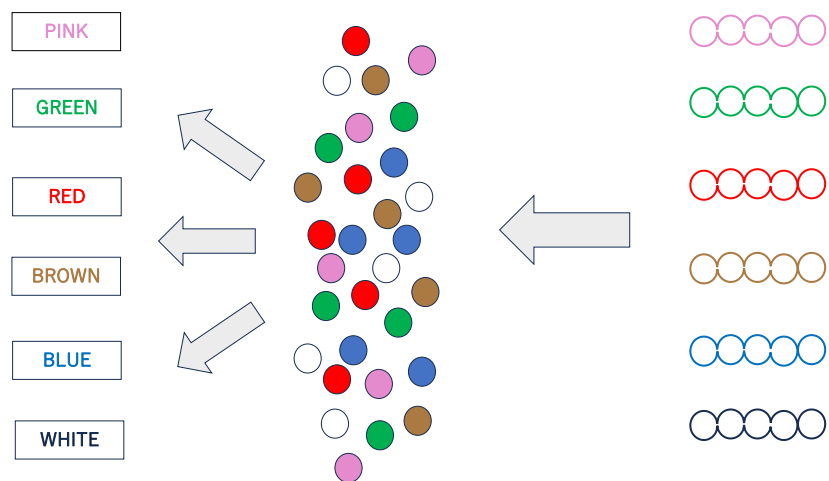
ワークショップに入る前に、現地の子どもたちと日本の学生との距離を近づけ、親しみを持ってもらうこと、楽しい雰囲気を作ることを目的とした。

「カラーボール集め」では、今後予定しているワークショップ「Scavenger Hunt」「Relay Race」の導入になることと、チームワークを高めることを目的とした。

2. 内容

「カラーボール集め」

- ① 決まったグループごとに列を作り並ぶ。
- ② グラウンドの反対側に、Pink, Green, Red, Brown, Blue, White の各色の書かれた紙をサポート係が持ち、間隔をあけて待機する
- ③ グラウンドの中央に、ガムテープで各6色に色分けしたカラーボールを混ぜた状態で配置する。
- ④ スタートの合図で、各グループの第一走者が中央のカラーボールの中から自分のチームの担当カラーを選ぶ。
- ⑤ 自分のチームカラー名の紙を持つ人の場所をゴール地点とし、拾ったチームカラーのボールを持って走る
- ⑥ ゴール地点に到着したらその場で座る。
- ⑦ 次の走者が④から⑥を繰り返す。
- ⑧ いち早くゴール地点にメンバー全員が辿り着いたチームが勝ち。



3. 反省点

「カラーボール集め」

- ・チーム振り分け後、整列させるのに時間がかかった。
- ・日本の学生の役割が細かく定まっておらず、目の前の子どもたちとのコミュニケーションが優先になってしまうことが多かったため、各担当をあらかじめ割り振っておくべきだった。
- ・事前の説明の段階で、ルールがしっかり伝わっておらず、スタートしてから学生が誘導して進んでいったため、事前に先生方と通訳の打ち合わせをするべきだった。



ワークショップ① Scavenger Hunt

1. Scavenger Hunt とは

スカベンジャーハントとは、「がらくた集め」という意味で、欧米ではポピュラーなレクリエーションの一つである。参加者は主催者からリストを与えられ、指定されたアイテムをできる限り多く集めて、時間や得点を競い合うというものだ。今回のワークショップでは、グラウンド内に隠されたゴミを探し出し、全員で集めてもらうという形で、実施した。

2. 目的

一つ目の目的は、ゴミを見つける、拾う、集めるという行動に対してのハードルを下げることである。実際に、グラウンドや道端などに落ちているゴミを目にすることが多く、ゴミを道端にポイ捨てする状況が日常となっていることがわかった。そのため、ゲームとして宝探しのよう楽しみながら、自身の体を動かし、自主的にゴミを集めてもらうことで、ゴミを見つけたら拾う、集めるという行動に対してのハードルを下げることを目的とした。

二つ目は、ゴミへの意識を向上させ、集める習慣をつけてもらうことである。

このワークショップを通して、日常生活の中でもゴミが目に残る、集める、ゴミへの意識を向上させ、集める習慣をつけてもらうことも狙いである。

3. 内容

- ① 現地で見つけたゴミや日本から持ってきたゴミをグラウンドに隠す。
- ② 隠した場所を把握できるよう、隠した場所の近くにガムテープでバツ印を貼る。
- ③ グラウンド内に、大きなゴミ袋を設置する。
- ④ スタートの合図で子どもたちに一斉にゴミを探してもらう。
- ⑤ 見つけたゴミは、グラウンド内に設けられたゴミ袋に入れていく。

4. 成果・課題

子どもたちは隠したゴミを楽しみながら必死になって探してきてくれた。中には、数人で協力し合い、木に登ってゴミを探してくる子どもたちや、私たちが隠したゴミ以外の、落ちているゴミも集めるなど、積極的に参加してくれていた。今回のワークショップを機に、普段の生活の中で落ちているゴミが目に残り、集めるといった意識になることが狙いであった。一方で、課題は今回のゴミ集めるという行動を、日常生活につなげることである。今回のワークショップではゲーム感が強くなってしまい、意識を日常生活に繋げられなかった可能性がある。そのため、今回の Scavenger Hunt をその場限りでなく、日常生活の習慣として取り入れられるような工夫が必要であると考えた。



ワークショップ② What type of waste did you find?

1. 目的

目的は、ゴミの種類を把握してもらい、分別できるよう知識をつけてもらうことだ。また、分別する意味を理解してもらうことも狙いである。スリランカでのゴミの種類認識は、主に腐るゴミと腐らないゴミの2種類であると、元 JICA 青年海外協力隊でスリランカに滞在していた北さんに伺っていた。そのため、2種類をより細かく分けた6種類あることを理解してもらう必要があると考えた。このワークショップにて、より細かい分別の種類を認識してもらい、意識してもらうことができるよう、スライドを用いて楽しく学んでもらえる工夫をした。

2. 内容

- ① 室内にてスライドを用意しワークショップを行なった。
- ② Plastic, Glass, Wood, Metal, Paper, Organic の6種類のゴミを、スライドにて、文字と絵を載せて説明。実物も見せ、各名称を声に出して一緒に読んでもらう。
- ③ 6種類の説明が終わったら、各種類の絵のみのスライドや実物を用いて、クイズを行う。
- ④ クイズは、挙手制で行なった

3. 成果・課題

室内でスライドを用いて復唱してもらうことで、子どもたちの注目をスライドとファシリテーターに集めることができた。また、クイズ形式、挙手制にすることで、子どもたちは積極的にワークショップに参加してくれていた。一方の課題としては、全て英語で行なっていたため、英語での内容を理解しきれない子どもたちもいたことである。周囲に合わせて復唱している子どもたちもいたと推測できる。そのため、次回からはシンハラ語をスライドに載せる、通訳を今回以上に徹底するべきであると言える。加えて、座る位置によって参加度合いに差ができてしまった点も課題である。前に座った子と後ろの子で、当たる確率や積極性に差が生まれてしまったため、座る位置に関係なく参加しやすいワークショップを意識する必要がある。



ワークショップ③ Relay Race

1. Relay Race とは

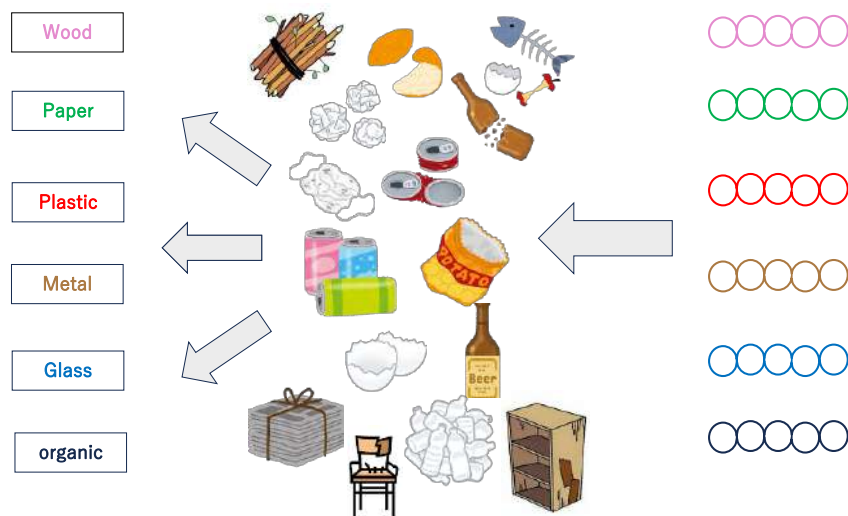
カラーボール集めの形式を用いて、チーム対抗戦のリレー形式にして、ゴミ分別を楽しく実践できるように考えたワークショップである。

2. 目的

一つ目の目的は、ワークショップで学んだ内容を Relay Race にて実践しアウトプットすることで、理解を深めることである。ワークショップ②「What type of waste did you find?」の内容を踏まえ、6種のゴミの分別を実践することでより学びを深めることにつながる。また、アイスブレイクでの「カラーボール集め」やワークショップ②「Scavenger Hunt」でのゴミを集める応用でもある。二つ目はチームのメンバーで協力し合うことを目的とした。チームのメンバーと協力し合い、楽しみながらゴミ分別への理解を深めることで、協調性を養うことも狙いである。

3. 内容

- ① カラーボール集めのように、各チーム1列になりグラウンドに並ぶ。
- ② 各チームの担当するゴミの種類を振り分ける。
- ③ グラウンドの中央に、6種のゴミを混ぜて散らばせておく
- ④ 反対側には、6種のゴミの名前が書かれた紙を持った人を配置する。
- ⑤ スタートに合図で第一走者が各チームの担当するゴミを探し出す。
- ⑥ 担当のゴミの名前が書かれた紙を持つ人の位置まで走る。
- ⑦ 到着し、その場で着席をする
- ⑧ 第二走者以降も順番に⑤～⑦を繰り返す。
- ⑨ 一番早くチーム全員がゴール側に着席したチームが勝ち。



4. 成果・課題

カラーボール集めの動きをもとに、ワークショップ③の内容を踏まえ、体を動かしながら学んだ内容を実践することができていた。また、同じチームのメンバーを応援し、チームで協力し達成するという体験につながると考えられる。

一方の課題は、室内とグラウンドの移動に時間がかかった点。ルールを把握できていた子どもたちと、そうでない子どもたちがいた点。子どもたちの意識が、ゴミの分別以上に競争に向けてしまっていた点である。子どもたちのルール理解度については、英語のみでの説明により差が生まれてしまったと考えられる。現地の先生やペラデニヤ大学の大学院生などが通訳してくれたものの、事前準備の段階では英語のみの説明で進行を考えていたため、次回からは通訳も想定し、現地の先生やペラデニヤ大学の大学院生と密に連絡を取り合うことが重要である。子どもたちの分別への意識については、ゴミを早く反対側に運ぶことに意識が向いてしまう子が多いように見えた。学んだゴミの種類を、分別するというゲームを交えて楽しみながら実践する、アウトプットすることを目的としていた。1日に複数のワークショップを実施したことで、時間がタイトになっていたため、ルール説明が動作の説明が主となり、雑になってしまったと考えられる。次回からは競争以上に分別への意識をしてもらおうよう、丁寧に説明する必要があるといえる。



—2 日目—

2 日目のワークショップのゴール

- ・子どもたちに達成感を感じさせ、変化を起こす能力があるという自信を持たせること
- ・プラスチック廃棄物を使って自分で作れるものを例に挙げること
- ・1 日目で見つけた身の回りのゴミを分別するという視点を持ってもらうこと
- ・スリランカで主流の paper, organic, plastic 以外のゴミの種別を知ってもらうこと

アイスブレイク「猛獣狩りに行こうよ」

“Can you catch the word?”

1. 目的

日本で言う猛獣狩りを行った。環境問題にまつわる語句を現地の子ども達に楽しく伝え、次に行うワークショップに繋げることを目的として行われた。

猛獣狩りでグループを形成し、次に行われるワークショップのグループ作りのためでもある。

2. 内容

- 1 手を叩きながらみんなでリズムをとり、「Can you catch the words? We can catch the words!」と全員で声に出しながら、歩き回る。
- 2 出題者がお題を出し、その文字数と同じ人数でグループを作りその場に座る。
※お題は、環境やゴミ問題に関する英単語を選んで出題した。
Ex) Recycle, Global warming, Can など
- 3 ①、②を繰り返し、徐々にお題の文字数を増やしていく。
- 4 最終問題では、約 70 人の子どもたちが6チームになるようにお題を出題する。
- 5 集まったグループを、今後のワークショップのチームとする。

3. 成果と課題

このアイスブレイクを実施したことの成果は4点ある。

1点目、小学生の子どもたちは体を動かすアクティビティを好んでいる。そのため、今回のように体を動かすアイスブレイクを非常に楽しんで行っていた点。2点目、子どもたちにとってアイスブレイクが非常に楽しかったようで、次に行われるワークショップも心待ちにしてくれた点。3点目、アイスブレイクに子どもたちだけでなく聖心生も参加したため、共に体を動かすアクティビティをしたことにより信頼関係を築けた点。4点目、環境問題に関する単語を用いたため、次のワークショップに繋げやすかった点。

課題は2点ある。1点目、子ども達に広がってもらう為に一緒に走ったところ、”stop”と言っても子ども達が走り続けてしまい、グループ作りに時間がかかってしまった点。2点目、走り回る子ども達を見てあげられていないことがあり、規定の人数とは異なった人数で集まってしまっていた点である。



ワークショップ①「スリランカのゴミについて知ろう！」

“Let’s learn about waste in Sri lanka!”

1. 内容

- 1子どもたちが「Show us please」の掛け声をかける。
- 2実際に普段子どもたちが目にするスリランカのゴミを見せる。
- 3ゴミはどの種類に分別されるのかを聞く。

(1日目のワークショップの Relay race の際に分別した復習)

Ex) Wood, Pepar, Plasic, Metal, Glass, Original のどれに分別されるか



2. 成果と課題

このワークショップを実施したことの成果は2点ある。1点目、1日目に体感を通して学んだ分別を、今度は知識として繰り返し教えたため子どもたちの記憶に残った点。2点目、子どもたちが普段目にするゴミを使って分別したので、子どもたちに子どもたち自身が普段から分別することの必要性を感じてもらえた点。

課題は2点ある。大人数の子どもたちに向けて一度にワークショップを実施したため、声を出して積極的に参加する子どもと声を出せない子どもがいた点。子どもたちに問いかけをした際に、騒がしくなりすぎてしまい進行が止まってしまうことがあった点である。

ワークショップ②「3R とは何かを知ろう！」

“What are the 3 R's?”

1. 内容

- 1 子どもたちに3Rを知っているか投げかける。
- 2 パワーポイントのスライドを子どもたちに見せながら説明する。
- 3 子どもたちに自分達のあとに続いて3Rの名前を繰り返し言ってもらおう。
- 4 3Rの幅広い可能性を伝える。



2. 成果と課題

成果は4点ある。1点目、3Rを学ぶことで子どもたちが今まで不必要だと捨てていたゴミもまだ可能性があることを伝えることができた点。3Rで変化したごみの再利用方法の具体例をあげて、子どもたちに写真で見せることで、子どもたちにとって内容を理解しやすかった点。3点目、学生たちがそれぞれ担当する列の子どもたちを見ていたので、子どもたちの反応や様子が伺いやすかった点。4点目、ファシリテーターの後に続いて子どもたちに単語を繰り返してもらったことで、子どもたちが参加でき、楽しんでもらえた点。

課題は2点ある。1点目、前のワークショップに引き続き座って話を聞く座学スタイルだったため、数名の子どもたちが飽きてしまい友達同士で話し始めてしまうことがあった点。2点目、説明を英語でしたため子どもたちにとって少し理解が難しいところがあった点である。

ワークショップ③「何を作りたいですか？」

“What would you like to make?”

1. 内容

1 子どもたちにスライドで紙やプラスチックなどのゴミがどのように変化するかアイデアを見せる。

2 班に分かれて一班につき一名の聖心生が入り、子どもたちにゴミからどのような物が作れるのかアイデアを紙に描いてもらう。

3 子どもたちがアイデアを描き終わった後、班の中で一人ずつアイデアを発表してもらう。

2. 成果と課題

成果は3点ある。1 点目、少人数の班に分かれてワークショップを行ったことで、子どもたちとの距離を近づけることができた点。2点目、ゴミのマイナスなイメージから、新たなプロダクトができるというプラスなイメージに変換することができた点。3点目、子どもたちの想像力から新たな発想を得られた点。4点目、子どもたちへの説明に時間がかかっていた時、JICA の青年海外協力隊の方がシンハラ語の単語を教えてください、説明を手助けして下さいました点。

課題は3点ある。1 点目、子どもたちと聖心生で互いに母語が異なるため、互いの意図が伝わらず言語の壁を感じた点。2点目、体を動かすワークショップとのギャップに退屈してしまう子どもがいた点。3 点目、英語が分からない子どもに説明することが難しく、説明に時間がかかった点。

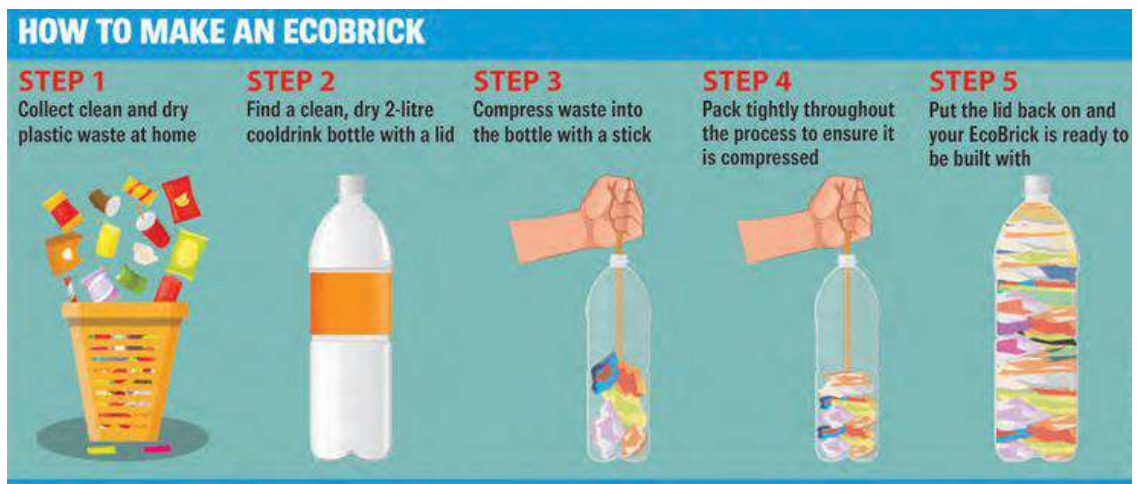
加えて、反省点は3点ある。1 点目、シンハラ語を帰国前に勉強していく必要があった点。2 点目、ワークショップの説明が上手くできなかつた時に混乱した表情を子どもたちに見せてしまった点。3点目、説明の時間と子どもたちに描いてもらう時間の管理を考える必要があった点である。



ワークショップ④「エコレンガ」 “Eco-bricks”

1. 内容

- 1 つ前のワークショップと同じ班で行う。
- 1グループにつき1つのペットボトルとプラスチックのゴミを細かくしたものを配る。
- 子どもたちとペットボトルの中にプラスチックを詰める。
- 入り切らなくなるまでプラスチックを詰めてエコレンガを作る。
- それぞれの班で作ったエコレンガを集め、1つの椅子を作る。



2. 成果と課題

成果は 4 点ある。1 点目、プラスチックをペットボトルに詰めるという作業を子どもたちが進んで行っていた点。2 点目、子どもたちは始めプラスチックのゴミに対して汚い、触りたくないというようにマイナスに捉えていたが、カラフルなプラスチックをペットボトルに詰めることで綺麗な見栄えになり、ゴミも綺麗に再生して使うことができるとプラスに感じてもらうことができた点。3 点目、子どもたちは自分たちが作ったエコレンガから椅子を作ることができたことに自信と誇りを持ってもらうことができた点。4 点目、自分たちが作った椅子の上に座った時に、笑顔になり喜んでいった点。

課題は2点ある。1 点目、安全性の高い柔らかいビニールだけでなく、硬いプラスチックも使用したため、危険性のあるものは事前に排除したが、プラスチックの角で怪我をする危険性が少なからず生じてしまう点。2点目、椅子を一脚しか作らなかったので子どもたち全員が座ることを体感できなかった点である。



2日目のワークショップを終えて

2日目のワークショップのゴールである「子どもたちに達成感を感じさせ、変化を起こす能力があるという自信を持たせること・プラスチック廃棄物を使って自分で作れるものを例に挙げること・1日目で見つけた身の回りのゴミを分別するという視点を持ってもらうこと・スリランカで主流の paper, organic, plastic 以外のゴミの種別を知ってもらうこと」はワークショップの中で子どもたちに楽しんでもらいながら、また学生たちも楽しみながら教えることができた。

2日目のワークショップの中で一番難しかった点は、ワークショップ③「What would you like to make?」である。紙にプラスチックゴミでどのようなものが作れるかを書いてもらうことを説明することが非常に難しかった。子どもたちに説明が伝わらなかった理由は主に2つあると考えた。

1つ目は、互いの母語が異なることで子どもたちに英語で説明する必要があり、子どもたちにとっては理解しづらかったためである。2つ目は、普段再利用せずに捨てる習慣がついているプラスチックのゴミが、新たなものに生まれ変わるということを想像することが、子どもたちにとって難しかったためである。1つ目の言語の壁により、子どもたちに説明が行き届かなかったことについては、事前にシンハラ語の単語を勉強すべきだったと反省した。説明が難しく頭を抱えている際に、JICAの青年海外協力隊の方がシンハラ語を使って子どもたちに説明することを手伝って下さった。その方は、現地に来てまだ半年しか経っていないのだが、子どもたちに伝わるように一生懸命説明して下さいました。数日しか滞在していないわたしと違い、普段から現地の方と接しているからこそ、シンハラ語を使って何度も諦めずに説明してくださっているのだと感じ、心から尊敬の念が沸いた。2日目の子どもたちがプラスチックゴミから新たなものを作れることを想像することが難しかった点は、ワークショップ⑤を行ったことで子どもたちの創造力を広げることができ、子どもたちに希望を与えられたことで解決できたと考えた。2日目のワークショップはどれか一つが欠けてもゴールが達成できなかったのではないかと思うほど、全てを実施できたからこそ良い結果となったのだと感じた。

Workshop for Green Youth Leadership

—3日目—

アイスブレイク

1. 目的

ワークショップに入る前に想像力や思考力を働かせることを目的とした。

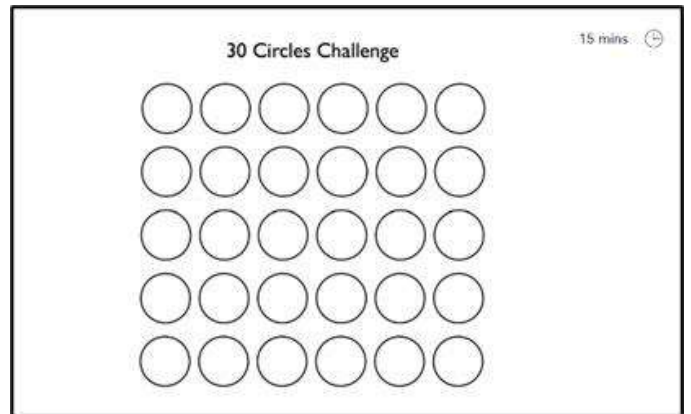
また、児童と班の担当の学生との距離を近づけ、チームワークを高めることも目的とした。

2. 内容

【30 Circles Exercise】

円を何かに見立てて、思いついたものの絵を自由に描く。

ワークシートには 30 の円があり、時間内にできるだけ多くの絵を描く。



ワークショップ① What is 'A GOOD LEADER' ?

1. 目的

身近にどのようなリーダーがいるのか考えることで、リーダー像を明確に理解することを目的とした。

2. 内容

リーダーシップ理論について説明をし、リーダーとはどのような人物を指すのか理解したうえで行う。

〈記入すること〉

- ・身近にいるよいリーダーだと思う人物の名前と絵
- ・その人物を選択した理由
- ・そのよいリーダーが持つ性格や性質(丸で囲む)

A GOOD LEADER

Draw a picture of someone you think is a good leader.

Name: _____

Why I choose this person: _____

Circle the characters that make them a good leader:

Good listener Motivating
Supportive Inspiring Good communicator
Kind Positive thinker Ambitious
Makes decisions Collaborates
Flexible

3. 成果と課題

・ある児童がよいリーダーとして、対象校の校長先生を挙げていた。多くの児童が両親を挙げていたなかで、共通の人物が挙げられたことで、リーダー像を具体的に理解することができたと思う。

・班についての学生は児童のシンハラ語やタミル語を話せないため、やることを把握できていない児童に対して補足説明ができなかった。

ワークショップ② My Personal Vision Board!

1. 目的

自分の将来について想いを馳せ、表現することで、頭の中の将来像を具体的にする。

2. 内容

それぞれの将来の夢やどのような大人になりたいかを画用紙に表現する。

カラーペンや雑誌の切り抜き、マスキングテープや折り紙を用いてよい。



3. 成果と課題

- ・児童らがとても意欲的に絵を描いたり、写真を貼っており、ワークを楽しんでいた。
- ・課題点として、学生がある児童の絵を褒めると、その様子を見た児童が、自分の将来像と異なるが、褒められた絵と同様の絵を描いたケースがあった。

ワークショップ③ The ‘CAN DO’ Attitude!

1. 目的

自分で悪い状況を変えられて、物事を良い方向に変えることができるということを言葉にして書き残してもらうことで、できるという前向きな考え方を意識させること。

ポジティブな言葉を探すことで、前向きな考え方を意識させること。

2. 内容

The ‘CAN DO’ Attitude!

空欄に合うように、将来の夢や叶えたいことを記入する。

Positive Attitude

文字列の中から、文字列の下にあるポジティブな英単語を探しだし、マルで囲む。

ワーク終了後に全体で見つけられた英単語を共有し、単語の意味を紹介する。

The “CAN DO” Attitude!

Sometimes you might think you can't do something or you may worry that you might never get there!

You need to change your thinking!

You CAN and WILL be able to do the things you want to!

So, think about the following statements and complete them. You can write or draw what you think the statement should say about you.

I CAN be _____

I CAN achieve _____

I CAN change _____



Positive Attitude

E C H S U O E G A R U O C S A R Y
 E M A L T H C Z X A H M Q D P Z A
 V L P U E L O V E O T A U E P O E
 E K P F C M D M Q A W L W T R R F
 I S I P A J T E H X O E M E E K M
 L S N L E W L S I I R R O R C F T
 E E E E P O V G G V G E T M I Q N
 B C S H J S M I L E L T I I A L E
 L C S I T C E P S E R C V N T Z D
 E U W G I O F Q G J Q A A A I B I
 U S T I W E Z M C R W R T T O L F
 A C H I E V E M E N T A I I N G N
 B E A U T I F U L J B H O O N G O
 K I P O S I T I V E H C N N U W C
 F M I R A Q X C N G D D E V A R B
 M Z M M G E C Q W D F S T R O N G
 R E H T E G O T M B G P G E P O D

together	character	beautiful	helpful
smile	confident	appreciation	growth
courageous	brave	strong	respect
happiness	achievement	determination	success
positive	believe	peace	love
motivation			

3. 成果と課題

・ワークシートに英語で記入する必要があったため、一人ひとりの児童がシンハラ語やタミル語で記入したことをその都度、現地の方に翻訳をしてもらわなければならない、時間を要した。

・英語の学習が進んでいない児童らは、スペルの長い英単語を探すことに苦勞していたり、英単語の意味を理解できないままワークを進めていたため、本来の目的があまり達成できなかったように感じた。

ワークショップ④ Paper Tower

1. 目的

グループで作戦を練ったり、協力してタワーを作るなかで、学んだリーダーシップを発揮してもらおう機会にすること。

また、リーダーに必要な協同の姿勢を身につけてもらうことを目的とした。

2. 内容

グループになり、裏紙を折ったり、丸めたりして変形させてペーパータワーを立てる。

より高いペーパータワーを作ったグループが優勝となる。

〈手順〉

1. タワーの試作品を作る
2. 試作品の YWT をもとにグループ内で作戦を立てる
3. 再度タワーを作る
4. 各グループで反省点を話し合う
5. ゲームの結果を発表し、各グループでワークの感想を共有する

〈参考〉 振り返りの手法 YWT

Y：やったこと

W：わかったこと

T：次にできること



3. 成果と課題

- ・話し合いの時間が短く、十分に作戦を立てることができなかったグループがあった。
- ・グループで話し合って協力することよりも、個人でタワーを作り始めてしまい、グループワークが成立しなかったグループもあった。

コラム 「ゴミ処理場訪問」

Dumping Site

スリランカでの滞在で一番印象深かった出来事はゴミ山 (Dumping Site) についてです。事前にニュースや教科書で見た世界が目の前に現れて、今まで匂ったことのない異臭がし、あまりの衝撃に私は言葉を失いました。そこではゴミを集め、村で売れるものを探している「子どもたち」や、機械などを使わずに自力で運んでいる「女性」3 人の姿が在りました。中でもその女性たちはこの強烈な匂いの中、マスクや手袋もつけず無防備に働いており、ゴミが健康に対して有害であることがスリランカでは問題視されていないのだと痛感した瞬間でした。また、日本の子供たちは義務教育で日中は友達と遊んでいたり勉強をする事が当たり前となっています。しかし、Dumping Site にいる子供たちは勉強をする事なくお金になるものをゴミ山から探し、街から通っている事が当たり前になっているのです。その現実を見た際に私は、今まで何も考えずに“もの”を捨てていた自分に自己嫌悪を抱きました。



スリランカのゴミ問題

近年、途上国では廃棄物排出量が増加し、深刻な社会・環境問題を引き起こしています。スリランカも廃棄物問題に悩む国の一つであり、廃棄物処理とその周辺地域で健康被害や環境劣化が急速に加速しているのです。住民たちはゴミ箱を買うお金がなく外にゴミをポイ捨てすることが当たり前になっており、プラスチックゴミが道端で燃やされています。村で処理されるゴミの中には発がん性物質を含むものもありますが、こうしたごみを不適切に処理することにより、住民らの間でめまいや頭痛、咳などの健康被害が発生しています。こうした状況にもかかわらず、住民らは環境保護に関する知識を持ちながらも、より持続可能な環境を求める価値観や行動、ライフスタイルの変化が不足しています。2016年にペラデニヤ大学大学院が実施した調査によれば、ウダペラデニヤ村の住民のうち9割が家庭でプラスチックを焼却しており、子供たちに適切なごみ処理方法を教える家庭は皆無とされているのです。



日本のゴミ問題

日本で暮らす方々の中に「ゴミ処理 = 焼却」というイメージをお持ちの方は多くだと思います。事実、日本では排出されたゴミの約 8 割が焼却されており「焼却大国」と呼ばれる程です。また、日本の廃プラ輸出はアメリカに続いて 2 位となっています。アメリカや日本から輸出されたプラスチックごみは東南アジアに運ばれます。途上国には多くのプラスチックごみが届けられますが、最悪な方法で処理をしている廃棄物が多くあるのです。スリランカではプラスチックゴミが屋外で燃やされて発生した煙と汚染物質によって呼吸器系の病気が発生しているなどの近隣住民の健康被害が報告されています。このように、私たちがリサイクルされていると思い込んでいたプラスチックゴミは、スリランカのような途上国に送られ、誰かの環境を害したり街の土や水、空気を汚しているのです。私たちは自分たちの行動を再度見直さなければ、スリランカで見たゴミ山やそこで働いている女性や動物たち、そして子供たちを救うことは遥かに難しいのです。

感想文集

堀江凜「スリランカの光～sthuthiy ඉස්තුති, ස්තුති～」

増田美玖「No limit No perfect」

園田詩歩「可能性に満ち溢れている国」

岩本芙季「愛の溢れる国」

漆澤有香「スリランカから日本を見つめる」

栗林幸香「意識改革と cooperation の実感」

坂東優「2度目の参加だからこそ得られた学び」

湧井ひかり「希望と現実と温かさ」

南木美咲「国際協力をする者として」

三浦さくら「Family of the Earth」

スリランカの光～sthuthiy ඉස්තුතී, ස්තුතී～

基礎課程 1年 堀江 凜

スリランカの方々、文化から学んだこと

<国民性>

・とても思いやりが深く、他人にも温かく接して下さる方が多かった。

歩いていても多くの方が私たちに微笑みかけ、話しかけて下さいました。

東京では、道ですれ違う相手に興味を持つ人が滅多にいないので、驚くと同時に人の温かさを感じました。ペラデニヤ大学の方々は何度も訪問した時だけでなく、訪問するたびに毎回たくさん種類のお菓子和紅茶を振舞って下さいました。そして、いつも笑顔で話しかけて下さったことがとても印象的でした。大学の先生の中には日本の大学に留学をしていた方もいらっしゃいました。

・夢を持っている人が多かった

日本の若者の中には、夢や将来に対しての希望を抱いていない人が多いと感じていました。スリランカで話した方に、夢を聞くと質問した人全員が夢を持っていました。夢を話しているときの彼らの目はキラキラ輝いていて希望が溢れていました。若者だけでなく、ペラデニヤ大学の院生の方々もスリランカをもっと良くしたいという希望に胸を膨らませていました。自分たちの国に誇りを持っているからこそ、国の役に立ちたいという思いを持つのではないかと思います。

・みんなで分け合う精神

スリランカの方は得たものを独り占めするのではなく、なんでも分け合います。誰かがお弁当を忘れたら、忘れた人が自分が忘れたということをおぼえてしまうほど自分のお弁当を分け与えるほどと JICA の方が話していました。物がたくさん手に入らないということを経験してきた国だからこそ、なんでも分け合うということが当たり前の習慣になっているのではないかと思います。日本は昔、物が簡単に手に入らないという経験をしたのにも拘わらず、大量消費社会となり一人一つの物を持つことが当たり前になってしまいました。それにより、物を分け与えるということも少なくなってしまったのだと気付きました。

<スリランカから日本に対しての印象>

大学の先生の中には日本の大学に留学をしていた方もいらっしゃいました。大学の先生方だけでなく、道を歩いているときに日本語で話しかけてくれる方や英語は話せないけど日本語は話せるホテルの従業員さんもいました。スリランカには日本に行ったことはないけど、日本の文化や言語を学んで下さる方がたくさんいること知りました。スリランカについて何も知らずに、スリランカに来てしまった自分が本当に情けなく感じました。

<宗教>

仏教を信仰している方全体の 7 割ほどを占めており、信仰心がとても深いです。バスのドライバーが信号待ちの間に、近くの寺院に御賽銭しに行く様子も見ました。ペラデニヤ大学の副学長さんは、静けさの中に力強さがあり人格者の風格を放っていました。昔から信じる教えがあるからこそ、芯がしっかりとっていて揺らがないものがスリランカの中にはあるのではないかと思います。

<Vimalabuddhi School で気づいたこと>

Vimalabuddhi School では、多くの学びと気づきをいただくことができました。中でも特に子ども達の純粋性とその可能性です。子ども達は人種や言語といった物に偏見を持つことなく接してくれました。また、物事を敏感に察知しており、大人よりも共感力が高いのではないのではないかと思います。素直な彼らは日常生活の中で大人から与えられる影響と周囲の環境から与えられる影響がとても強いと感じました。そのため、私たちがゴミはゴミ箱に捨てようねと言っても大人がゴミを家の外や学校の外に捨てているのを普段から見ている、そもそもゴミを捨てるゴミ箱が無ければ彼らが行動することは難しいと思います。そのため、今後は子どもだけでなく親子で参加できる環境問題を考えるワークショップや学校と地域で協力して取り組むことができる環境作りを考えていく必要があると思いました。

<最後に>

スリランカでは、毎日が学びの連続でした。特にスリランカの方々の人柄から学ぶところは非常に多かったです。本当に穏やかで、いつも笑顔の方が多かったです。また、私たちの提案をたくさん受け入れ、様々な場面において私たちがした質問に一つ一つ丁寧に答えて下さいました。スリランカに行く前は、環境問題を子ども達やスリランカの方に教えに行くと考えてしまっていました。しかし、現地に行くと日本人である自分自身が環境問題を教えると言えるのだろ

うかと思う場面がたくさんありました。日本にいるときは大量消費社会の一員になってしまい、環境問題に真剣に向き合えていなかったと反省しました。スリランカでは、環境問題に取り組む方がたくさんいました。現地のごみ処理場では、プラスチックのごみを新たな製品に変える機械を使っていたり、家庭でもコンポストを設置している方がいたり、下水処理をココナッツの皮を使って行っている市もありました。一方で、ゴミ回収のトラックが来る場所が自宅から遠いなどの理由から自宅の近くでゴミを燃やしてしまうという現状もありました。実際にスリランカに行くと、市長さん、ペラデニヤ大学の教授、大学院生、そして JICA 方々などの多くの方が環境問題に向き合っていました。スリランカの将来の為に動かれている方々と一緒に過ごさせていただくことは貴重で刺激的な時間でした。また、スリランカの美しい自然や素晴らしい人格の方々と共に過ごさせていただく中でスリランカがより美しい国になるために、そして持続可能な国になるために自分自身も貢献したいという使命感が湧いてきました。多くの学びをいただいたスリランカに恩返しをしたいです。今後はスリランカの文化や仏教の良さに基づいた環境問題へのアプローチを考え、スリランカにフィットするアプローチを見つけたいです。そして何より、日本に住んでいる私は完全に環境問題の原因にならないということは非常に難しいことです。しかし、環境問題の原因になっているというマイナスな考えを持って生活するのではなく、地球にやさしい行動をしようとポジティブな考えを持ち楽しみながら日頃の行動をエシカルな暮らしに変えていきます。

No limit No perfect

基礎課程 1年 増田美玖

日々目の前に広がる光景に圧倒されたスタディツアーでした。私は今まで「発展途上国」と呼ばれる国に足を運んだことがなかったため自分の想像上の「発展途上国」と実際の状況には乖離がありました。テレビで流れるユニセフの動画や YouTube でみる「かわいそう」と思われる映像とは裏腹に実際はもっと素敵で温かく、元気な子どもたちがたくさんいました。今まで「発展途上国」に対して漠然としたマイナスイメージを持っていましたが、今回のスリランカへの渡航によりそのイメージが大きく変わりました。子どもたちは医者や教師になりたいなどの夢を持っていて、将来に対して希望を抱いているように感じました。彼らに平等で十分な教育の機会を得ることができれば、彼らの夢は達成できると思うと教育が持つ力は強いと体感しました。四日目に訪れたゴミ処理場では、今まで動画や写真で見ていた世界が目の前に現れて言葉を失いました。媒体を通してしか見ることのなかった状況が実際に存在することに驚きを隠せなかったことに加え、日本はゴミ輸出 2 位だからこそ、他国にこの状況を作らせてしまっているかもしれないと思ったと同時に加害者意識に見舞われ、やるせない気持ちになりました。日本に帰ったら、自分たちの行動を再度見直そうと考えていましたが、やはりそう簡単に変えることができない生活になってしまっているのと思います。私は高校時代からサステナブルファッションに興味がありましたが、十分なお金がなければ持続的に生産過程までしっかりと考えられたお洋服を購入する事は難しいため、ファストファッションを買わざるを得ず、どうすれば良いのか自問自答している毎日です。このようにオーガニックを買いたくとも、そしてそれに興味があっても購入することができなければ、サステナブルではない商品を買わざるを得ません。この問題は私の中でずっと考え続ける問題ですが、学生生活を通して答えを見つけていきたいと考えています。

私は最後のラップアップで “No limit No perfect” というフレーズをあげました。あの場では語りきれなかった思いをここに記そうと思います。まず私がこのスタディツアーを通して 1 番印象的だったのは、青年海外協力隊のお二方のお話です。私は永田先生のスタディツアーの話聞くまでスリランカの場所も名前も聞いたことなかった。しかし同じ日本人である青年海外協力隊の方々は、スリランカという土地で現地の言語を勉強して、そして現地語で現地の人と話し、スリランカの方たちと一緒に仕事をしていることに驚きました。青年海外協力隊の存在は知っていましたが、それがどこでどんな活動しているかなど知りませんでした。だからこそ活動を知る良い機会になりましたし、現地で現地の人に寄り添った活動はきっとこれから成果をあげるのだろうなと思いました。特に森樹音さんが仰っていた Dengue 熱の活動は地道な取り組みではありますが、スリランカの人々の安全のために必要不可欠であり、取り組みが大成すれば Dengue 熱による死者は減るのではないのでしょうか。私があげた “No limit No perfect” には彼女たちの活動また我々が行った活動には限界はなく、また新たな問題は生まれ続けるため

「完全な形」となって終わることはない、という意味を込めました。これは国際教育協力だけでなく、地球課題とされている様々な問題や難民の支援など多くの問題に当てはまることではないでしょうか。

このスタディツアーを通して多くの学びがありましたが、うまく言葉にできない感情や思考がたくさんあった期間でした。この感想文を書くにあたってできる限り(忘れないためにも)言葉にしてみました。半分以上は私の頭の中に思考として残り続けているように思えます。後期の授業を通してこの思考をより深いものにし、行動を起こすきっかけにしていきたいです。

可能性に満ち溢れている国

国際交流学科 グローバル社会コース

2年 園田詩歩

1. なぜスタディーツアーに参加しようと決断したか

私は、高校一年生のときにカナダに一年間留学し、帰国後「発展途上国の教育問題」について興味が出ました。日本では、義務教育で最低でも、九年間の教育が保障されています。しかし、現在でも世界には、教育を受けたくても受けることのできない子どもたちが存在することを本やインターネットで知り、不平等であるなと思いました。何もしなくても、ごく普通に時間を過ごせば、教育を受けることのできるいわゆる「先進国」の子どもたちと、教育を受ける環境を獲得できるチャンスが少ないいわゆる「発展途上国」の子どもたちが存在します。カナダから帰国後、発展途上国の子どもたちのために何か私はできることはないのか、と考えることが多くなりました。また、私は、これまでに4度留学を経験しており、滞在国からたくさんのことを学び、多くのことを助けられました。そのため、次は私が世界に恩返ししたいという強い思いも同時にありました。私は大学入学と同時にラクロス部に入部しました。朝から夜までラクロス一筋で一年間を送っていましたが、大学2年になり、自分の将来を真剣に考えるようになりました。ラクロス部に所属していると、将来のことを考える時間さえなく、一日一日が過ぎていく日々でした。永田先生の授業内で、スリランカのスタディーツアーの詳細の連絡があり、私が高校生のおときからやりたかった「国際協力」を行うことができる！しかもいわゆる「発展途上国」で！と思いました。そして、ラクロス部を辞めるのは今だ！と思い、ラクロス部をすぐ辞め、スタディーツアーの選考に申し込みました。

2. 現地での学び

私は、これまでにいわゆる「先進国」と呼ばれる国にしか訪れたことがなく、初めての発展途上国でした。そのため、出国前の私にとってスリランカは未知の世界でした。何が私を待ち受けているのか不安もありつつ、新しい世界を見ることができると思い、とても楽しみでした。Luggageを受け取って、扉が開くと、一気に「スパイス」の匂いがしたのを覚えています。また、貨幣両替の客引きのAmbitiousさに少し驚きました。スリランカに滞在して感じたことの一つに、現地の人々の温かさがあります。「Shiho!Shiho!」と話しかけてくれたり、「How was your day?」と聞いてくれたり、彼らの温かい話を毎日のように受け取っていました。また、朝起きると、動物の鳴き声が響いており、1日の活動を終え、ホテルに帰ってくると、空全体がオレンジや紫色の景色が見られ、1日の疲労を癒してくれました。東京では感じることのできない自然の豊かさを身に沁みて感じました。その一方で、スリランカの建物に入ると、ゴミ一つなく綺麗でしたが、外に行くと「ごみがない」ことはなかったです。滞在していたホテルからスリランカ郊外の景色を見ると、綺麗な景色が見える一方で、白い煙、ゴミを燃やしているはずであろうが場所がところどころ見受けられました。

【教育の大切さ】

ごみ収集の場所が家から遠いため、自分の敷地内に十分な土地があるため、ごみを燃やしているということを現地の人からお話を聞きました。私が環境破壊の知識が全くなかったとして彼らの立場になって考えると、一日一日を必死に生きているのだから、ごみ収集の場所にゴミを持っていく時間と体力を使うより、家の土地で燃やすことは妥当なことであるなと思いました。これは、ごみを燃やすことで発生する人間への害を彼らは知る機会がないため、実際に起きている問題であるなと思いました。同時にやはり「教育」の大切さを改めて実感しました。現地の大学の先生に、「スリランカの子どもたちは学校の選択肢は多いのか？」と尋ねたところ、子ども自身の Ability と家庭の収入で学校が決まるとのことでした。その話を聞いた後、親の収入で質の良い教育を受けられるか否かが決められることは不平等であると改めて強く思いました。実際に、彼らとアイスブレイクをしたり、Work Shop をしたりすると、子どもたちの目はキラキラしていて、一人ひとり素敵な夢を持っていて、新しい知識をたくさん吸収していました。Potential があるのに、その良さを引き出せずにいるなと思ったと同時に、何もすぐできない私の無力さも感じました。

【Dumping Site】

スリランカの滞在で一番印象深かったのは、Dumping Site です。私の目に映る全てが、ゴミ山で、今までに匂ったことのない異臭がし、自分が実際にゴミ山の光景を見ていることが信じられなかったのを覚えています。ゴミを、機械などを使わずに、自分の力で運んでいる人は全て「女性」でした。彼女たちは生きるためにこのような仕事をせざるを得ないということを考えると、非常にもどかしかったです。ゴミ山の上にいる若い青年たちが見えて、彼らは何をしているのか？と尋ねました。ゴミ山からゴミを拾って売れるものを集めて、売ってお金を得ているとのことでした。教科書で学んだこと、教科書やインターネットで見たことのある光景が、目の前に広がっており、嘘であってほしいと思ったと同時に、これが現実であり、何も言葉に表すことができず、これが言葉を失うということかと思いました。日本は自国のゴミを中国などの国に輸出していたりしています。そのため、実際にゴミ山を見た際には、他人事ではないなと思いました。Dumping Site で話を聞いている際に、大学院生と話す機会がありました。大学院生は初めてゴミ山を訪れ、一番印象的であったことを聞くと、働いている人が紙マスクのみだから彼らの健康に良くないと言っていました。教育を受けたいと思っている大学院生でさえもゴミ山を見たことがなく、ゴミ山の現状を知らないことを知り、村に住んでいる人なら尚更ゴミ山のことを知らないだろうなと思いました。

【国際協力とは何なのか】

スリランカに滞在中、国際協力のあり方やそもそも国際協力って何なのかと考える時間が多々ありました。日本のゴミ処理システムをそのままスリランカに適応できたら大間違いであって、負荷がかからない程度で、彼らに適応した案を考えることが重要なのだなと思いまし

た。また、国際協力は一回の滞在で大きな成果を得られることを期待してはいけないのだなと思いました。焦るのではなく、地道に行うことが非常に重要なのだなと思いました。彼らの普段の生活にズカズカと入っては、1人よがりな支援になってしまいます。実際に行うことは非常に難しいですが、やはり、これらの問題は、現地の人たちが自国の問題に対して向き合って、私たちがサポート役となり、現地の人と共に改善に向かっていくことが良い解決法であると思いました。

3. 最後に

このスタディーツアーは私にとって、非常に価値のある時間でした。スリランカに来たときは、目に映るもの全てが新しく、「発展途上国」の現状を毎日のように見せつけられて感情が追いつかなかったことを覚えています。

実際に、現地の人に、私が何かできたかはわかりませんが、少なくとも私は、彼らから言葉で表すことのできないくらい多くのことを学びました。彼らは「生き抜く力」を持っています。そして、スリランカは「希望」を持った国であると断言できます。変われるチャンスをたくさん持っています。また、本当に「国際協力」は深いし、答えのない問いばかりであるなと思いました。日本に帰国したから終わりなのではなく、何かに繋がるように学びを止めないようにしたいです。多くの方のサポートのおかげで私はスリランカに行くことができました。このような機会をいただけたことに感謝の心でいっぱいです。



愛の溢れる国

教育学科 教育学専攻

3年 岩本英季

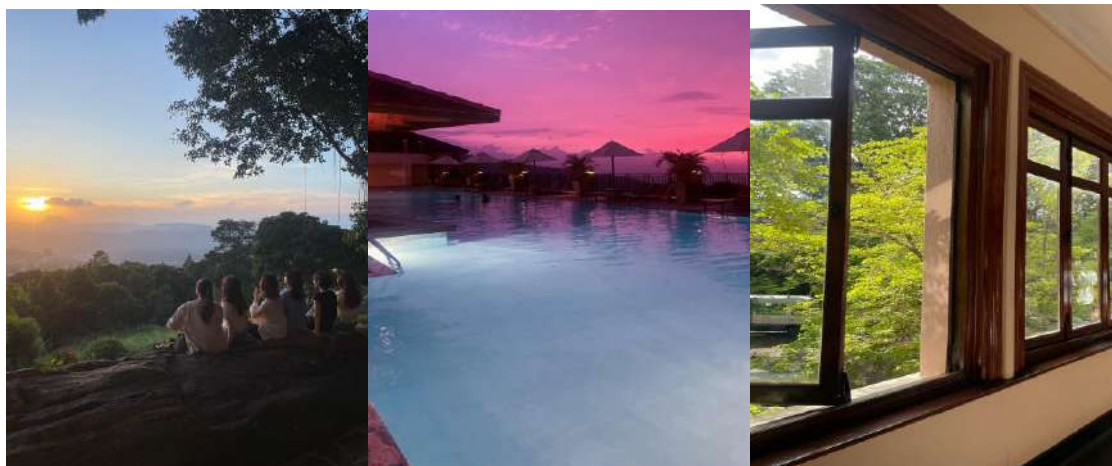
1. なぜスタディーツアーに参加したか

幼い頃から、祖母と身体障がい者施設でボランティアを経験したり、高校時代にはバナナペーパーの事業を立ち上げている方にインタビューしたりと大学入学前から、誰かの役に立ち、全ての人々が幸せに生きられる社会について深く考える機会が多くありました。そんな中で永田先生の「発展途上国における教育問題 1」の授業を受けている最中、今回のスタディーツアーの機会を知り、ぜひ参加したいという強い意欲が湧きました。ただ、当初は自己成長を追求しつつ、発展途上国に関する知識も深めるという浅はかな考えで参加を決断しました。周囲にはスリランカを訪れたことのある人や将来国連関連のキャリアを考えている仲間が多く、私は自身が開発教育や持続可能性について学ぶ機会が、単に授業内でのものに限定されているのではないかという不安を抱いていました。しかし、スリランカでの約10日間は非常に貴重なもので、その過程で自分自身が大きく変化し、成長できたことを確信しました。この旅が、自分の考え方や価値観に深い影響を与えたことは間違いありません。



2. スリランカの壮大な自然と現地の人々が持つ純粋な眼差し

スリランカに行く前は、不安に満ちた想像が頭を駆けめぐりました。自分の中にはスリランカについての固定概念があり、生きて帰れるか、食事が合うか、どのくらい日本と異なるのかという心配がありました。実際、友人たちにもスリランカへの旅行が珍しいことから、非常に心配されました。しかし、初日にホテルのベランダで空を見上げた瞬間、日本では見られないような壮大な星空に圧倒されました。この静かでゆったりとした瞬間が、長らく感じていなかった平和な時間として心に残りました。自然の美しさに感動し、日本に帰ることが惜しく感じられました。翌朝、小鳥のさえずりが耳に心地よく響き、目の前に広がる山々と椰子の木に囲まれた風景を楽しむ朝食を取りました。また、身近に野生の猿、コウモリ、ヤモリなどの生き物がいる姿にはとても驚きました。夕方になると、一日のワークショップの疲れも吹き飛ばすくらい空がピンク紫に染まる美しい夕日を見ることができ、感動的な瞬間だった事を覚えています。スリランカの自然環境は、大きなエネルギーを秘めており、その美しさに身も心も浄化される感覚を味わいました。そして、スリランカの人々の純粋な目に強く印象付けられました。小学校で行ったワークショップでは子供たちが幸せそうに無邪気に笑顔を見せてくれたこと、そして現地の人々が親しみやすく、まっすぐな目で接してくれたことに、彼らの希望に満ちた生活が垣間見えました。ワークショップを通じて、言葉が通じなくてもジェスチャーや表情を通じて子供たちとコミュニケーションをとることができ、国際協力が実感できる瞬間でもありました。



3. 現実

ダンピングサイトを実際に訪れ、そこで感じた匂いや景色を通じて、地球規模の問題の深刻さを改めて認識しました。これまでニュースで見たことがあるだけで、その場に女性や子供、そしてこれから生まれてくる子供がいる現実に触れ、地球規模の問題について改めて深く考えさせられました。それまでの固定観念が覆り、日本からたった8時間でこんなにも異なる生活が営まれていることに驚きが隠せませんでした。さらに、JICAの方々からお話を伺った際には、子供たちは日本の学生がワークショップを行った2、3日後にはゴミをポケットにしっかり収納する一方で、2週間後には再びポイ捨てしてしまうという現実があることに、このワークショップの持続性の難しさを実感しました。スリランカでは「環境」という授業が行われているとのことで、子供たちが環境に対する意識を高めることを願いました。そして、JICAの森さんがダンピングサイトに週に一度足を運び、デング熱の伝播を防ぐために尽力されている姿勢に深い印象を受けたことを覚えています。しかしながら、現地では日本の女性の声が会議で通りにくいという現実に触れ、男女の格差や人種差別がなくなることを切望しました。

これら現地の声や現状を知り、政府の協力が不可欠であることも理解しましたが、それ以上にスリランカの子供たちが変革の先頭に立っていることを実感しました。スリランカが持つ壮大な自然、動物、そして人々の純粋な眼差しを守るために、私たち日本人もゴミ問題や国際的な環境問題に対してより深い関心を寄せるべきだなと強く考えさせられました。また、現地の人々にも自己啓発を促し、ゴミの適切な処理や環境保護に取り組むことが大切です。次回の参加が実現した際には、今回出会った子供たちの成長を実感し、街の煙が減少し、川に捨てられたゴミがなくなり、更に多くの笑顔が広がっていることを期待しています。





スリランカから日本を見つめ直す

教育学科 教育学専攻

3年 漆澤有香

スリランカの人々がゴミ問題への行動が積極的ではないと感じた場面があります。はじめに感じた場面は訪問した小学校で掃除をした時です。ちりとりとゴミ箱がないことに気がつきました。先生方に集めたゴミはどこに捨てればいいのか伺うと「外に捨てて」と言われました。開いた口が塞がらないと言うのはまさにこのことか、と驚きを隠せませんでした。Adventure Hunt という Work Shop (校庭にゴミを隠して探してもらう) の準備を校庭でした際に、ペットボトルや誰かのテストの紙など日本の小学校では教室のゴミ箱に入っているものたちが捨てられていることに気がつきました。Workshop では私たちが隠したゴミ以外に校庭に落ちているゴミも子どもたちは集めることができていました。ゴミをゴミと認識することはできています。それを、分別などをして処分する習慣をどのように生活に馴染ませていくのが今後の課題になります。スリランカでは仏教を重んじており、仏教の考え方が彼らを動かす鍵になるという案が出ました。では、日本人を動かす鍵は何になるのでしょうか。お正月にクリスマス、さまざまな宗教が生活に入り混じっている日本。私たちの潜在意識に語りかけるものとはなんでしょう。

DAY3 に Green Youth Work Shop を行い、Leader・LeaderShip とは何か？ について子どもたちに考えてもらいました。Leader に必要な資質をいくつかの言葉からひとつ選ぶアクティビティで、子どもによって単語の捉え方が異なっていることに気がつきました。子どもたちの考える Leader について知ることで、私自身に不足している資質を認識することができました。子どもたちとの関わりは自分自身の長所と短所を知ることにつながりました。彼らも、普段関わることのない私たちとの関わりの中から何か学びや気づきを得ることができていたらいいなと思っています。

青年海外協力隊の方々から仕事の内容や現地の様子を伺う機会がありました。何日かご一緒させていただきましたが、青年海外協力隊の方々のタフさに驚きました。私は幼少期から国際協力に興味があり、現地での仕事も視野に入れていました。今回でスタディーツアーに参加させていただいたのは2回目でしたが、2回を通して身体的に現地での仕事は難しいということに気づくことができました。私は自分の得意なフィールドで国際協力を行なっていきたいと思っています。

最後に私が10日間で印象に残った言葉を紹介します。

・『グレーゾーンにとどまる力』(永田先生 ラップアップ時)

白黒つけることが優先されている世の中で、私自身も白黒つけることに熱心になっているところがあります。白か黒か、ふたつの選択肢から物事を判断するというのは安直な考えであり、効率を重視する社会の問題点です。今回のスタディーツアー中に直面した多くの問題が白か黒

かだけでは解決できません。今後社会に出ると、たくさんの矛盾に悩むと思います。自明の理の捉え直しをし続けていくことが今後の課題です。

・『同じという前提を持たない、違いの差をはかるものさしを持つ』(JICA 山田所長)

スリランカで文化も言語も何もかもが違う環境の中で、働かれているなかで大切にされていることを教えていただきました。他者と関係を持つことを改めて学ぶことができました。大切な人の違うところを愛することができる人になりたいです。

意識改革と cooperation の実感

教育学科 初等教育学専攻
3年 栗林幸香

私は今回初めてスリランカに行った。事前に調べていたときのイメージは、いわゆる「発展途上国」で、豊かとはいえないものだった。しかし、現地について人々と触れ合い、私の中で、「豊かさ」の考えが大きく変わった。確かに、物理的には豊かではないかもしれない。だが、たくさん自然と人々の希望が溢れている国だと感じた。そして、スリランカでの経験から大きく3つのことについて学びを得た。

1つ目にスリランカに来て印象に残ったことは、現地の人々の笑顔だ。子どもたちの笑顔。先生たちの笑顔。若者の笑顔。両親の笑顔。それらを自分の目でしっかりと見て、受け止めることができたのは、このスタディーツアーに参加したからこそだ。

私達は、スリランカ 1 日目から小学校に行った。私は幼児教育コースを取っているが、実際の子供たちと触れ合うのは初めてで、緊張の中小学校に赴いた。しかし、子供たちの笑顔を見ると自然と、緊張からこの子たちの笑顔や楽しんで学んでいる姿をもっとみたい、という気持ちに変わっていた。その気持ちの変化に伴ってか、子供たちも始めは不慣れだったが、ワークショップを毎日するにつれて、私たちのことをより信頼し、意欲的に参加しようとしてくれる姿の子が増えていったのを感じた。このように、遠い国から突然土足で踏み込もうとしている私たちに対して、子供たちや先生、ペラデニヤ大学の関係者を含め、スリランカの人々は暖かい笑顔で迎えてくれた。そこには警戒心や「知らない」からくる排除や差別しようというネガティブな気持ちはなく、心の広さがある国民性だということを感じることができた。

2 つ目は、課題となっているゴミ問題についての意識の変革だ。私達は、子供たちにゴミ分別の大切さについてのワークショップをした。その後、JICA の青年海外協力隊の方々からリアルなお話を伺う機会があった。その時に、子供たちにワークショップを行った直近では、意識や行動が変わっているが、時間の経過と共に効果が薄れていくという、当たり前のことかもしれないが悲しい現実を教えていただいた。このことから、必要となるのは「継続的にインパクトを与え続けること」だと考えた。

さて、私たちはワークショップを経て、子供たちにインパクトを与えることができたのだろうか。不安になることが多かったが、少なくとも彼らの記憶の片隅に残っていてほしいと思う。そのため、長い年月で経過を見ていき、彼らが大人になり、子どもたちに当たり前のようにゴミ分別の大切さについて教えているという未来にできるよう、彼らの将来に希望を託したいと強く思っている。そこで必要なのは、正しい知識と判断を養うことと、ゴミ問題を始めとした環境問題を教育の一環としてより積極的に、そして継続的に取り入れていくことだ。そのような充実した教育ができることを目指して、少しでも尽力していくと強く誓った。

さらに、こんな名言がある。『心が変われば行動が変わる。行動が変われば習慣が変わる。習慣が変われば人格が変わる。人格が変われば運命が変わる。』これはアメリカ合衆国の哲学者・心理学者のウィリアム・ジェームズの言葉だと言われている。他にもヒンズー教の言葉とも、ガンジーの言葉などとも言われることがある。似たような考えをマザー・テレサも残している。この言葉に沿うのなら、行動を変えるには心を変える必要がある。確かに、動機づけが外発的であった時よりも内発的動機づけ、つまり「心」に訴えるほうがより強力で効果も持続する。だからこそ、スリランカの子どもたちが、本質を知り、自ら変えたいと願うような機会を作るべきだと考えた。

3つ目に、「Cooperation」つまり協力という言葉が、私の中でこのスタディーツアーのキーワードとなった。スリランカでの様々な経験は、決して私一人で達成することはできない。プロジェクトを組んでくださったJICAの方々や、一緒に参加した教員や院生や学生、現地の小学校や大学などの協力があってこそ、私はこの素晴らしい経験ができた。一人一人がパズルのピースだと置き換えて考えると、一人でも足りなかったら、できなかった経験、味わうことのなかった感情、得ることができなかった学びが、もしかしたらあったのかもしれない。このような小さな「Cooperation」が大きくなって、国際協力に繋がって行くのだと思った。

私はスリランカの夕日をホテルから毎日見るのが好きだった。しかし、山から煙が幾つか上がっていた。始めはそれを気にしていなかったが、ふと気づいたのは、それらの煙は燃やされているゴミかもしれないということだ。バスで移動するとき、必ずと言っていいほど道端で燃やされているゴミをたくさんみた。それらはプラスチックなどが燃やされているため、健康に害を与える他にも、山火事になってしまうのではないかと不安を煽る。それに気がついた日から、夕日を見る時には、この上がっている煙が、いつの日かゴミではなく、家族団らんの食事の煙に変わってほしいという些細な願いを込めて見るようになった。

昼間は真青な快晴で青一色だったが、日が沈むにつれて、空はパレットのように様々な色で溢れている。少し緑がかった青や紫、ピンクや黄色など、素敵なグラデーションがそこには広がっていた。そして私はこの空のように人には一人一人違う色を持っていると感じた。色が違っててもそこに優劣はない。無理に同じ色になったり、違いを埋めようとしたりせず、その違いを個性として尊重し協力し合える関係が大切なのだと考えた。

そして、このことは永田先生が仰っていた「グレーゾーンに留まる力」というものにも繋がっていると思う。私はどうしても白黒ハッキリさせることや、完璧にさせたいという完璧主義な気質がある。しかし、その間のグレーゾーンが本当は大切なのだ。熟考し、曖昧の中で葛藤していくことで、多角的な視点を養うことができるからだと考えた。一つの形に固執するのではなく、柔軟な思考力を身につけていきたい。

最後に、このスリランカでの経験と学びが私にとっても一時的なものにならずに、人生の糧となれるよう、培ったことを日々の生活で活かしていきたい。自分や周りの持っている価値観のあり方、教育のあり方、それらに対し常に疑いの目を持ち、自分に問い続けていく。そうして、は

じめに述べた私の中の「豊かさ」の定義が変わったように、自分を変えて、周りを変えて、社会や世界のあり方までも少しずつ変えていきたい。私は、国際協力や教育に関心を持ち、いつか社会貢献したいと考える人のうちの一人だ。そして、既にこれを読んだあなたは私の同志になり、協力し合う仲間になると確信している。

2度目の参加だからこそ得られた学び

教育学科 教育学専攻

3年 坂東優

今回のスタディツアーで印象的だったことが3つあります。前回のツアーから続けて参加できたからこそ、気づいた事柄もあったように感じています。

1つ目は子どもたちが「アッカー」と呼んでくれたことです。ウィマラ・ブッディ小学校で実施したワークショップの出来事でした。そのときの子どもたちのキラキラした瞳を今でも鮮明に覚えています。最初に呼ばれたとき、意味を理解できず反応に困ってしまいました。その際、そばにいてくださった青年海外協力隊員の方が、シンハラ語で「お姉ちゃん」を意味すると教えてくださいました。

前回3月のワークショップでは言葉が通じないことに加えて、子どもたちの熱烈な歓迎にただ圧倒されてしまい、子どもたちと十分コミュニケーションできたという実感はありませんでした。そこで私は、今回のツアーの目標の1つに子どもたちとの積極的なコミュニケーションを思い抱いていました。それだけに、仲良くなった子どもたちが「アッカー」と呼び慕ってくれたことで、言語を超えたコミュニケーションを実感できました。とても嬉しい出来事でした。

2つ目はワークショップで出会った子の成長の様子に立ち会えたことです。名前も知らない3年生ぐらいの女の子でした。3月に初めて彼女と出会ったとき、彼女はワークショップの参加にとっても消極的でした。発言もなく、ただ教室の隅でじっとしている彼女を、私は引っ込み思案な子なんだと思っていました。ところが今回のワークショップで彼女は、自らのワークだけでなく、低学年の子どもたちを手助けするなど、とても積極的に参加してくれました。さらには、私たちが伝えたい事柄を子どもたちに代弁して伝えてくれて、ワークショップが円滑に進むよう手伝ってもらいました。

彼女は3月には想像できなかったぐらいに変化し、私に成長を感じさせてくれました。彼女にとって今回が2度目の体験であったことが、彼女を積極的にさせたのかもしれない。スタディツアーが関わるプロジェクトの目的の1つに、子どもたちのリーダーシップの育成があります。彼女を通して、その成果の一端を見ることができたと思うと同時に、このプロジェクトのやりがいを実感することができました。

3つ目は自身の意識の変化です。私はスリランカの方々の課題解決に役立ちたいと考えツアーに挑みました。しかし、ツアーを通じて、その考えは自分勝手に自己中心的ではないかと考えるようになりました。課題解決と謳いながら、実は現地の文化に土足で踏み込んでいるのではないかと感じるようにもなりました。ツアー中、ワークショップに参加した子の自宅を訪問しインタビューする機会を得ました。私たちはその子の母親に、家庭ゴミの処理方法やコロナ禍の影響などを質問しました。彼女の回答は「コロナ禍の影響はない」というものでした。しかし、インタビューに案内してくれたペラデニヤ大学の院生は、その家庭は信仰する宗教の関係か

ら地域の中でも特に貧しい地区に住んでおり、コロナ禍の影響は確実にあるはずと教えてくれました。

この話を聞いたとき、私は、もしかするとその母親は私たちに強がってみせたのかもしれないし、あるいは私たちを見て「(突然訪ねてきた)あなたたちには話さないよ」と考えたのかもしれない。インタビューが母親に本心とは異なる回答をさせたのではないかと想像したとき、私たちが、彼女の誇りや気持ちを傷つけてしまったのかもしれないと思いました。私は少し暗い気持ちになりましたが、時間が経過した今では、国際協力とか開発援助を考える際に意識しておきたい事柄を学ぶきっかけになったと感じています。

実は今回のスタディツアー参加は、最初は躊躇していました。参加したいと思いつつも、参加のための経済的な負担が少なからず大きいと感じていたからです。しかし、申込期限ぎりぎりになって、印象的だったナマルさんという方の言葉を思い出しました。ナマルさんはキャンディ市廃棄物管理課の責任者です。3月の訪問時、プロジェクトに関する会議の席上で、ゴミ処理方法の改善に成果を出したナマルさんに対し、私は「あなたのその情熱はどこから来るのですか」と尋ねました。そのとき、ナマルさんは「あなたの国からだよ」と即答してくださいました。彼は JICA の廃棄物管理の研修で日本に滞在経験があったのです。私はその言葉にとっても感銘を受け、国際協力の素晴らしさを感じていました。その言葉を思い出して、私は両親に再度の参加を相談し、今回もスタディツアー参加することができました。

前回に引き続き、今回もとても貴重な経験をすることができました。参加を支援してくれた両親や、ご指導くださった聖心女子大学、慶応義塾大学の先生方、共に学び合った仲間たち、スリランカで出会った方々、このプロジェクトに関わるすべての皆さんに感謝したい思いでいっぱいです。この経験を糧に自身の今後のさらなる成長につなげていきたいです。

希望と現実と暖かさ

心理学科 3年 湧井ひかり

<温かさ>

今回、JICA の協力のもとスリランカ草の根プロジェクトに参加して大きく感じたことは、希望と現実と人々の温かさです。私は、発展途上国と呼ばれる国への渡航が今回で初めてでした。授業やインターネットなどでのイメージや知識はあったものの、自らの足で現地へ行き、肌で感じることで、今まで以上に私たちの住む地球や社会について考えさせられる非常に貴重な経験をさせていただきました。

スリランカに到着してから帰国までの9日間の滞在期間、常に感じていたことは、人々の温かさです。深夜の 23 時ごろホテルに到着したにもかかわらず、スタッフの方々はとても温かく迎え入れてくださいました。ろうそくに火を灯すセレモニーと共に温かい紅茶を用意して下さり、初日から印象的でした。それ以降も、とてもフレンドリーに話しかけてくれたり、写真を撮ってくれたり、常に笑顔で、純粋におもてなしをしてくださっていることが伝わってきました。また、こちらの要望にも快く答えて下さりとても充実した滞在期間を過ごすことができました。人々の温か話を感じたのはホテルのスタッフの方々だけではありません。小学校の子どもたち、先生方、ペラデニア大学の大学院生、先生方、街ですれ違う人々など、スリランカで関わってくださった全ての人から、日本では感じられない優しさと温かさを感じ、とても新鮮でした。





<希望>

スリランカの子どもたちとの関わりの中で一番強く感じたことは「子どもは希望」ということです。渡航前、ワークショップを考えるにあたり、スリランカの抱えるゴミ問題などについて調べていました。その時感じていた正直な思いは、政府や町などの大きな団体が動き、制度が整わなければ、ゴミ問題の解決は難しいのではないかとということです。しかし、ここに来て子どもたちを含め多くの人と関わる中で、それまで感じていた思いは変化していきました。到着2日目は朝から小学校へ向かい、ワークショップのスタートです。上手くいくだろうかという不安もありながら始まった2日目でしたが、子どもたちが来た瞬間に場が明るくなり、笑顔に向けてくれる彼らを見て、私たちの方が元気をもらったことを覚えています。私たちはゴミの分別や環境問題について楽しく学んでもらえるように、ゲームなどを交えたワークショップ実施しました。3日目も2日目の続きのワークショップを行い、最後にはペットボトルとプラスチックを使い、全員でリユースの椅子を作りました。この2日間を経て私が感じたことは、目の前にいる子どもたちがこれからの未来を作っていくのだということです。子どもたちがこのワークショップや、プロジェクトを通じて、ゴミ問題、環境問題への関心を持ってくれたら、そんな子どもたちが増えたら、本当に未来を変えていくかもしれないという希望を強く感じたのです。また、私たちが子どもたちに与える影響は予想以上に大きいということも知ることができました。あと1年間続くこのプロジェクトで、子どもたちから街へと変化をもたらすことが実現できるかもしれないと、子どもたちから教えてもらったように思います。

この9日間で子どもたちだけではなく、たくさんの希望を見つけました。

Dumping Site に訪問した際、分別したプラスチックをゴミ箱や家の材料などにリサイクルし、試験的に作っていると実物を見せて頂きました。その中に、子どもたちとワークショップで作った椅子のように、ペットボトルの中にプラスチックを詰めたものがあり、売ることができると聞きました。子どもたちがとても楽しそうに、ペットボトルの椅子を作っている姿を思い出し、彼らが簡単に作れるものが売ることができるとい情報から、家庭や学校に取り入れられるのではと希望を感じました。

5日目は JICA の青年海外協力隊の 2 名の活動内容を伺いました。お 2 人の話を聞いて、言語も文化も違う国で、一人で苦勞しながらも、本気で地域を変えようとしている熱が伝わってきて、感銘を受けました。

また、3 月の渡航時は受け身で、静かだったニランティさんをはじめとする先生たちが、今回は積極的に声かけや通訳を手伝ってくれたという話を聞いて、子どもたちだけでなく先生方の変化もあることを知りました。

そして、変化は私たち学生も同様であると考えます。子どもたちや関わる人からもらったポジティブなパワーやエネルギーなど貴重な経験と同時に、答えのない問いや問題意識の芽生えなど、この9日間で経験した全てが今後の私たちの選択に影響を与えるでしょう。私たちがプロジェクトを通して、現地の人々に変化を与えると同時に私たちも変化し、お互いに良い刺激を与え合っているのだと考えます。また、ペラデニア大学学長との話や、キャンディー市長との話も、今後の変化への期待であり希望です。

実際にスリランカに来て、ワークショップを行い、たくさんの人と関わり、話を伺ったことで、くる前に感じていた“私たちだけで街を、人々の意識を変えることは難しいのではないか”という思いは消え、たくさんの希望を自分の目で見てくることができました。





<現実>

一方で、現実を痛感させられた場面もあります。一番は Dumping Site への訪問です。バスの窓から見たずっと先まで続くゴミの山を初めて目の前にした時、私は言葉が出ませんでした。テレビやインターネットで、さまざまな国々でこのよう光景があることは、知識として知っていました。しかし、実際に自分の目で見た時の衝撃は、今までとは比にならないものでした。バスでゴミの山を進んだ先には、コンポストがあり見学のため外に出る機会がありました。バスの扉が開くと、今まで嗅いだことのない強烈な匂いがして、私は外に出ることさえできませんでした。コンポスト呼ばれているいくつものゴミの山にはプラスチックも多く混ざっているのを見てわかりました。また、そこでは女性3人が手袋もせずに働いていたのです。その中にはマスクさえしていない方もいらっしゃいました。スタッフの方に話を伺い、毎日子どもがお金になるものを集めるために、街から通っているということも知りました。私は外へ出ることさえできなかった場所では、当たり前のように働いている人がいて、子どもの生活助けになっている現実が、とてもショックで衝撃的であったと同時に、そこで働く人が目の前にいるにも関わらず、外へ出られなかった自分が

恥ずかしくも感じました。もう一つ、Dumping Site で忘れられない光景があります。それは、そこに住んでいた犬たちの様子です。私は幼い頃から犬が大好きであったため、そこで目に入ってきた犬たちの姿はとても辛いものでした。そこで見た多くの犬はずっと地面に横たわっており、人間でさえ強すぎる匂いの中、はるかに嗅覚の優れた彼らは普通に生活していました。そして、目で見ただけでも有害だろうと思える、黒く濁った Dumping Site の水溜りの水を飲んでいたので。その時、1 番に感じたことは、そこに住む犬も、そこで働く人も何も悪くない。全ては過去の人間の積み重ねであり、目の前のゴミ山を作っているのは私たちである。ということでした。何も悪くない動物が、私たち人間によってこの現実の中に生きている。何も悪くない人が、ここで働かなければいけない程の生活を強いられている。この現状を作っているのは、私たちである。今までも感じていた問題意識を、今まで以上に自分事化した瞬間でした。Dumping Site から帰った後も、その衝撃から言葉が出ず、放心状態でした。私が見たあのゴミ山は、今後絶対に忘れることはないでしょう。そして、絶対に忘れてはいけぬ、これからの時代に残してはいけぬものです。年々気候変動の影響で、異常なほどに災害が増えている現在ですが、全ては過去の人間の積み重ねです。目の前のゴミ山も過去の積み重ねであり、私もこのゴミ山を作っているうちの一人なのかもしれない。そう考えた時、後世にこれを残してはいけぬという思いが、強く私の中に芽生えました。

現実を知ったのは Dumping Site だけではありません。青年海外協力隊の森さんの話のでも、現実を知りました。森さんの担当する地域の Dumping Site では、毎週のようにゴミ山に火がついているそうです。一度火がついてしまうと、癖付いてしまってどんどん頻繁に起こり、火も大きくなるとおっしゃっていました。しかし、現地の人は全く問題視しておらず、火がついていてもいつもと変わらず、ゴミ山から物を集めるなどの生活をしているそうです。いつ大火事になってもおかしくない状況ですが、問題意識もなく当たり前になってしまっている現状は、非常に危険であると感じました。

また、実際に街や村を歩いていると、何度も道端でゴミが燃やされている光景を目にしました。9日間の滞在で、何度も目にした光景であることから、現地の人々にとってそれが当たり前の日常であることが伝わってきました。街の川は大量のゴミで埋まっている場所もあり、これらが当たり前になっていることは非常に悲しい現実だと考えます。

加えてもう一つ悲しい現実を考えさせられたことがありました。到着して5日目、夜の振り返りの時間で知ったことです。その日の午前中はリーダーシップのワークショップが行われていました。2日目3日目の子どもたちの中から選ばれた12人のうちの1人が、お菓子のゴミを窓から外に投げていたことを知りました。ゴミを投げる前に、周囲を見渡して、見られていないか確認した後には投げ捨てたそうです。この話を聞いて、合計3日間行った子どもたちへのワークショップで、私たちは子どもたちに良い影響を与えられたと思っていました。実際に良い影響を与えることはできたと思います。しかし一方で、この行動を止められるほどの変革はもたらすことができていなかった現実を知りました。青年海外協力隊の森さんのお話で、森さんが子どもたちにワークショップを行った後、数日の間効果があっても、日数が経つと戻ってしまうことが課題とおっし

やっていました。これは私たちのプロジェクトでも同様です。その瞬間は良い影響を与えることができても、持続させる難しさを考えさせられる体験となりました。



<最後に>

今回の渡航を経て、上記に記載したように人々の温かさ、希望と現実のスリランカの様々な面を自らの目を見て、肌で体感し、経験することができました。この9日間、現実を目の前にしたと同時に希望もたくさん見つけました。現実を知った中でも、これから先の未来を変えていくことのできる子どもたちや、私たちのプロジェクトに親身になって協力してくださる心強い仲間が

たくさんいます。私たちは、現地の子どもたち、人々、街を変えるためにスリランカを訪問しましたが、私たち自身も変化させられていることに気付かされました。そして、後1年続くこのプロジェクトはより多くの人を巻き込んで、多くの人の変容のきっかけになっていくだろうと感じています。私は、今回初めてこのプロジェクトに参加して、この先も子どもたち、現地の先生方、大学院生、学校、町など、私たちに関わってくださった人々や、訪れた場所が変わっていく姿を見届けたいという思いが芽生えました。また、私たち日本チームがスリランカの人々によって変容していく、成長していく姿も見たいという思いがあります。しかし、来年の2月から1年間の留学を予定しているため、このプロジェクトに関わり続けること、変容を見届けることができません。しかし、今回の経験を機に、帰国してからも何らかの形で地球のことを考え続けたい。私たち人間が引き起こした地球の抱える課題を考え続け、自分自身何かアクションを起こせる人になろうという思いが、よりいっそう強くなりました。様々な問題を抱えながらも、とても温かく美しいスリランカという国に来て、このプロジェクトに参加できたことは、私の人生における財産です。この経験を通して感じた希望と現実、人々の温かさを胸に、地球の抱える課題に対して私は何ができるのか、考えて生きていこうと思います。

最後に、このプロジェクトに関わってくださった全ての方に心から感謝いたします。





国際協力をする者として

国際交流学科 グローバル社会コース

4年 南木美咲

今回 2 回目の渡航で自分たち、日本人の在り方を考え直さねばならないと強く感じました。私自身、スリランカの教育支援、問題解決の手助けをしようこのプロジェクトに参加しました。しかしそこにはスリランカに対する敬意や対等な目線がなかったと反省しております。今回の渡航では、自分たち日本がスリランカから学ぶべきことは多くあり、一緒に課題解決に向けて頑張る「仲間意識」の醸成の必要性を強く感じました。

第一に、自分が何かを与えるつもりが寧ろ、スリランカの人々・子供たちから笑顔と元気をもらいました。なぜなら彼らは疑うことなく私たちを受け入れてくれたからです。その要因の一つに4つ大学の大学が日本語学科を持っているということが挙げられます。実際‘I love Japan, I want to go someday.’そう声をかけてくれる若者が多い印象を受けました。対する自分はスリランカについて詳しくない。多くの日本人がスリランカの場所さえ知らないという状況にあります。日本人として申し訳ない気持ちが勝るばかりでした。

第二に、ゴミのポイ捨てや処理が追いついていないという問題がある中で、一部には日本よりも優れた制度や仕組みがあります。自分たちが訪れた大都市キャンディのゴミ処理場では、集めたプラスチックごみを種類ごと7つに分け(写真1枚目参照)、さらに色に分けて粉碎と加工をして新たな material を作り出しています。(写真2枚目参照)今は実用化に向けて施策を作っている段階で、目標はこれを使って建物を建てることだと所長のナマルさんが笑顔で教えてくださいました。それに対して日本は、年間 820 万トン排出されているプラスチックの半数以上がサーマルリサイクルとして焼却され、大量の CO2 が排出されているにもかかわらず「リサイクル率 80%以上」を謳っています。私個人としてはこの見せかけの言葉に一定の満足感があるもののように見え、グリーンウォッシュではないかと疑ってしまう部分があります。さらにスリランカには、ココナッツの皮の繊維で下水処理をしている自治体があり、バナナの葉を皿代わりにするなど、自然物で様々なものを作る文化があります。

ここから私は、いわゆる”先進国・日本”として彼らに何かを与えるのではなく寧ろ、学ぶべきことが多いと感じました。いくら各国の首脳同士が話し合っても、やっとの思いで条約が締結されても。一向に解決に至らないどころか、深刻化している貧富の格差や気候危機。人類が一丸となって立ち向かっていかなければならない上、日本にも課題が山積みの中で、「支援」「教えに行く」そんな言葉を口にしていて自分が恥ずかしいです。地球規模課題の解決という同じ目的を持っているのであるならば、お互い持っているものを教え合うのが正しい形ではないでしょうか。日本にはゴミ箱へ分別して捨てる、自治体がくまなく回収する素晴らしい習慣があるため、それを伝えることは大切です。その上で私たちはサーマルリサイクルではなくマテリアルリサイクルの方法を、大きな機械を使うのではなく植物で下水処理をする方法を、謙虚に学ぶべきで

す。そうでなければ、相互的な関係である仲間になることはできません。「経済的に豊かである日本人が何かを教えにきた」という認識が残るだけになってしまいます。貧困の家庭に訪れた後に、友人は強い怒りの目が忘れられないと言います。私はそこまでのものを感じることができませんでしたが、事後に友人と話し、JICA の方々のお話を伺う中で我々は高みの見物をしてきた観光客となってしまうことに気がきました。まずは自国の課題を知り、自覚を持つこと、そして謙虚さや学ぶ姿勢を持ち続けるべきです。国際”協力”に携わる者として、自分の在り方を今一度見直します。



写真1



写真2

Family of the Earth

教育学科 教育学専攻

4年 三浦さくら

大学生活もいよいよ最後の年となり、永田先生のスタディツアーに参加するのも今回で三回目になります。このスリランカスタディツアーが開催されることを知った時、私は申し込むかどうかとても迷いました。なぜなら、私は就職活動のさなかであり、内定すら一つもない状況だったからです。そんな自分の中で葛藤がありながらも、私は「やらずに後悔だけはしたくない」とネガティブな自分を捨て、全部 100%挑んでやり切ろうという気持ちで、申し込みました。

そんな念願のスリランカスタディツアーの切符を手にし、参加することができました。しかし、私は、現地に着いて二日目のワークショップ時に体調を崩してしまい、一人先にホテルに戻り休みました。始めて海外で体調を崩したうえ、まだスタディツアーは始まったばかりで、今後先行きが不安になり、ホームシックで両親に電話をし、ひとり泣いていました。すると、先生方や、友人たちから優しい声かけや支えにより、自分の中でエネルギーがみるみるうちに、湧き出てきました。このアクシデントが自分にとって、扉を開ける一歩になりました。スリランカのスタディツアーで初めて会い学年や学科もバラバラで、これまでよそよそしかったメンバーとも、自分から積極的に話すようになっていました。このマイナスの出来事から、私はよりみんなに信頼を築き、心を開いたのだと思います。

私は、スリランカに渡航してから、何が一番自分を元気づけてくれたのだろう、エネルギーを生み出したのだろうか最終日に考えました。食べ物、お寺、文化、動物、植物、空気、、、様々なことがありました。しかし、私は一番はやはり「人」です。聖心女子大学のメンバーである美咲、有香、凜、芙季、幸香、優、ひかり、美玖、永田先生、和可子さん、Eman、Marcosさん、明石さん、スリランカの人々、チャンドラ先生、バンダラさんそして Vimalabuddhi School の子どもたち... etc

正直、私は渡航する前はスリランカに対して、ニュースで、「経済破綻している大変な国」という淡い他人事のイメージを持っていました。他人のこと、他国のことをなかなか自分事として捉えることはできないと思います。環境問題でも、貧困格差でも、自然災害でも、戦争でも、社会問題でも... どこか遠い国、遠い人たちの存在、他人事。メディアで、地球温暖化の報道が多く流れる中で私は興味関心があるものの、本当に向き合うことができていることにもやもやしている自分がありました。頭ではわかっているものの、どこか他人ごとで危機感を持っていないことに周りとの温度差を感じていました。では、どうしたら、少しでも自分事に捉えることができるんだろうと考えました。それは、「人との出会い」だと思いました。私は人が大好きです。誰かと話すと元気が出てくるので、自分の中でエネルギーが湧き出て、やる気が出ます。人と出会うことで、その人と信頼関係を、友情関係を築くことができ、他人事ではなく、その人たちの

ため自分事に捉えられるよう、これからもどんどん人との出会いを大切に、「地球家族」をこれからも築いていきたいと思えます。

むすびにかえて

8月15日から23日までの8日間、コロナ明け2回目のスリランカ・スタディツアーが開催されました。前回3月の訪問では村の基礎調査が主な活動であったため、ワークショップも行ったものの準備が不十分のままで反省も多く残るものでありました。今回は本格的にプロジェクトが始動するということで参加者も10名に増え、6月末から約2ヶ月間かけて準備を進めて参りました。大川先生にワークショップをしていただき、7月には期末テストがある中、オンライン上で集まり、時には夜遅くまで話し合っておりました。ワークショップは臨機応変な対応が必要で、企画しても実行しないものもある前提です。それにも関わらず、「スリランカの子どもたちの笑顔のため」に、それぞれが担当を持って責任を果たし、この報告書作成まで走り抜けて参りました。

子どもたちに知識を与え、エンパワーするつもりで向かったスリランカ。しかし、むしろ子どもたちが元気と笑顔を与えてくれました。この経験を通し、持つ者持たざる者など存在しないこと、人と人が関わることで好循環が生まれることを学びました。コロナと経済危機による打撃を今もなお受けているスリランカ。あと1年半続く本プロジェクトを通じて子どもたちをエンパワーし、「グリーンユース・コミュニティ」を形成して小学校から社会変容を起こしていくために。そして彼らにエンパワーされた私たちが変容し、好循環が続いていくことを願い、むすびといたします。

最後になりますが、本プロジェクトに学生を参加させてくださいました永田先生、神田先生。右も左も分からない私たちにワークショップの手はずを教えてくださいました大川恵子先生、明石さん、マルコスさん、エマンさん、JICAコロボ事務所及び青年海外協力隊の皆様。現地でサポートしてくださったPGISの皆様、キャンディ市役所廃棄物管理課のナマルさん、キャンディ市教育事務所のディプシーさん、ウィマラブッディ小学校の先生方、子どもたち。及び聖心女子大学職員の皆さま、そして何よりツアーへの参加を後押ししてくれた家族の皆さまに心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

2023年度聖心女子大学
スリランカ・スタディツアー参加学生一同

